

大都市高校生の学習と生活 ーパーソナル携帯メディアとアルバイトに着目してー

千葉 勝吾 (東洋大学大学院・都立市ヶ谷商業高校教諭)

1. 本研究の課題

従来の学校では、朝、登校してから夕方に下校するまでは、無断外出する生徒を除けば、校外とのコミュニケーション手段は公衆電話1台といった状況であり、家に帰るか、予め待ち合わせしておかなければ校外の友人と連絡をとることはできなかった。

ところが、現在では携帯電話、PHS、ポケベルといったコミュニケーション手段を個々の生徒が持つことができるような状況となり、学校にいる間でもかなり自由に外部とコミュニケーションが可能となりつつある。

このような状況はクロスオーバー社会(藤田, 1991)の学校への浸透と捉えられ、そのなかで生徒の帰属意識をはじめとする学校に対する意識はどのように変化しているのか、また、そのようなパーソナルなコミュニケーションメディアに依存する傾向と子どもの特性(学力、進路、性格、友人関係)などとの関係はあるのかといったことを分析することを目的とした。

さらに、高校生にとってはパーソナル携帯メディアの使用料は高額であり、その費用をつくるためにアルバイトをしている生徒も増加しているといったことの実態についてもあきらかにすることを目的とした。

2. 調査方法

質問紙調査

(1) 調査対象 平成10年度 都立全日制普通科2学年に在学する者を対象に 1998年10月に実施。

(2) 調査項目 基本的属性、各種メディアとの接触状況、生活と学習の実態と意識。さ

らに社会の将来についての意識、友人など他者とのコミュニケーション関係について。

(3) 調査方法

調査地域 東京都区部に所在する10校

データ数 1,300 うち有効数 1,209

記入方法 教員の指示下での 集合自記記入
インタビュー調査

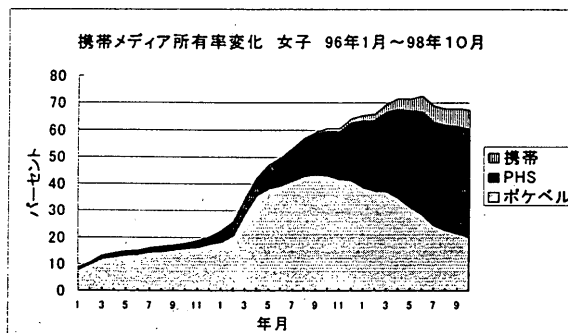
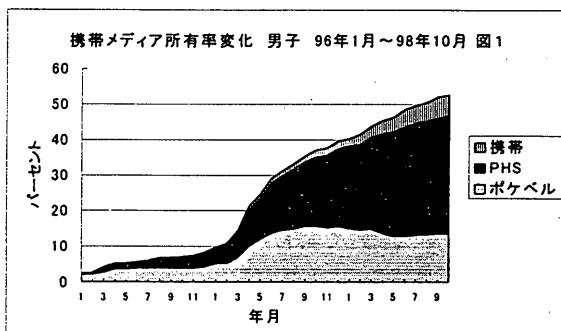
調査校のうち5校の生徒25名に対して、1校あたり概ね1時間30分のグループインタビューを実施。

3. 結果

パーソナル携帯メディアをめぐる状況

(1) 増加するパーソナル携帯メディアの自己所有。約2/3の都立高校生は、携帯などのパーソナルメディアを所有し利用している。

(2) ポケベルは携帯のメール機能に吸収され減少し、ポケベル→PHS→携帯への持ち替えが一般的。特に後発の男子は携帯志向が強くみられる。



(3) 「ポケベル」「ケータイ」などのパーソナル携帯メディアの自己所有は使用料の負担が大きい。「ケータイ」では 8 割の生徒が全額自己負担している。平均月額 7,000 円。

(4) 「ケータイ」などをどんどん利用する生徒と持つことの象徴的意味で満足する生徒に利用形態が分化。

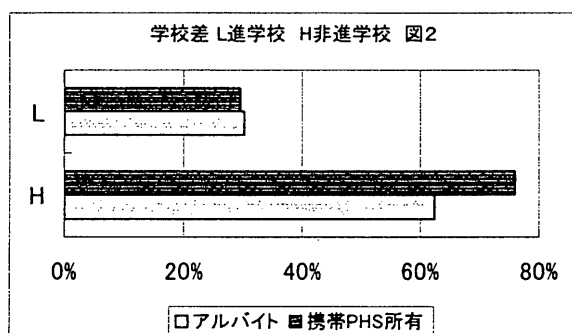
(5) 身体密着性の高い「ケータイ」はメディアのなかで、会話、テレビについてでなくてはならないものとしてあげられる。

(6) 高校生の生活スタイルは学業指向とアルバイト指向の分化している。

(7) お小遣いは、平均月額 8,700 円で、男子が女子より 3,000 円も多い。

アルバイトをする理由の第 3 位が「ケータイ」などの使用料を支払うため。

(8) 進学校と非進学校では「ケータイ」所有とアルバイトの様相は学校によって異なる



4. 結論

(1) 「寂しい」社会的自立

高校生の多くは、自分の意志と負担により、「ケータイ」などのパーソナル携帯メディアを所有し利用しているが、その点で、コミュニケーション・メディアが急速に普及している現代の情報化社会のなかで、ある種の社会的自立を実現していると見ることができる。

しかし、それは「寂しい」社会的自立であるように思われる。なぜなら、「ケータイ」などの所有は、必ずしも人間関係やコミュニケーション空間の拡大を意味してはいないからである。

実際、日常的に話しをする相手は、ごく近

い友人たちに限られている。「ケータイ」の番号をどれだけ多くの人に教えようとも、だからといってコミュニケーション空間が豊かになるわけではない。確かに多数のメッセージを連日受け取る高校生もいることは事実だが、そうしたメッセージの数を気にしたり、競い合うこと自体、「寂しい」社会的自立を象徴していると見ることもできよう。

(2) メディア所有による経済的負担の影響

従来の固定式電話や、テレビ・ラジオといったメディアの場合、一般に、高校生がその費用を負担する必要はない。しかし、「ケータイ」などの場合、利用すればするほど、費用負担も多くなり経済的負担が大きいことがあきらかとなった。従来、高校生とパーソナル携帯メディアとの関わりについては、情報化社会・メディア社会やコミュニケーション環境の問題として語られることが多かった。しかし、以上のような経済的負担やアルバイトとの関連を考えると、消費社会のなかでの高校生という側面も重要であると考えられる。

(3) 消費社会を浮遊する高校生

本研究であきらかになったことは浪費的で刺激的な消費社会のなかに無意識のうちに取り込まれてしまった、いかにも頼りない高校生の姿である。高校生になったら「ケータイ」を持って「バイト」するのが当然であり、そうしないと「カッコ悪い」といった、消費社会の作り出す流行に非自省的に取り込まれていく高校生の姿である。しかも、実際に「ケータイ」を持ち、それを使えば使うほど支払い金額も多くなるから、そのお金を稼ぐために、とりあえずヒマだから「バイト」とするようになり、一種の負の循環が起こっているように思われる。

(参考文献・資料)

- ・藤田英典『子ども・学校・社会』東京大学出版会, 1991
- ・『情報化社会と青少年』総務庁青少年対策本部編, 1998